

栄光館ファウラーチャペルのシャンデリア



同志社女子大学にとどまらず、同志社大学や同志社女子中・高の式典、毎日の礼拝、講演会など。多くの学生や教職員の記憶に残り続ける栄光館（国登録有形文化財）は、建築家の武田五一氏によって設計され、1932年に、同志社女学校の校舎（礼拝堂・講堂）として完成しました。

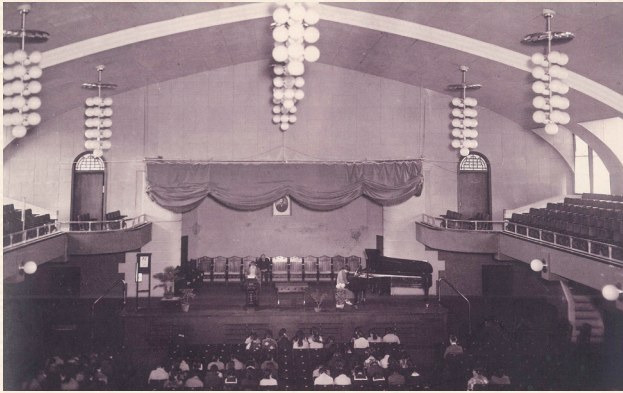
竣工当時の栄光館ファウラーチャペルの天井には、真鍮の骨組みに「葡萄の形」を模したシャンデリア照明が、2階客席部の壁面及び天井面には、グローブ球のブランケット照明と円形のシーリング照明が設置されていました。当時、完成したばかりの栄光館ファウラーチャペルでは、新島八重の葬儀が同志社葬として厳粛に執り行われました。

しかし戦時中、武器・砲弾を作るために、真鍮製であったシャンデリア照明は軍事物資としての金属供出の対象となり、撤去されてしまいました。1956年に蛍光灯型のシャンデリア照明が復活しましたが、竣工当時とは異なるデザインのものでした。

2012年、栄光館の改修工事にとともに、ファウラーチャペルもその対象となり、シャンデリア・ブランケット・シーリング照明が竣工当時の形に復元されることとなりました。復元する際は、竣工当時の写真や残存していたガラス球をもとに、シャンデリアの大きさや形を細かく推察。台座や骨組み、飾り金物は当時と同じ真鍮製にこだわり、細かい部分まで当時の趣きを再現しています。一方、照明には省エネやメンテナンスに配慮したLEDを使用し、ガラスの止め付け方法や落下防止装置を施すなど、安全性にも配慮したものとなりました。

再び、同志社女子大学の象徴としての誇りをたずさえ、栄光館ファウラーチャペルのシャンデリアは、温かい輝きを放ちながら、今日も私たちを見守っています。

(同志社女子大学 広報課)



竣工当時のファウラーチャペル（1935年3月卒業アルバムより）



改修後



改修前

〈栄光館2012年改修工事〉